

福田良輔著 『奈良時代東国方言の研究』

森山, 隆

<https://doi.org/10.15017/12258>

出版情報 : 語文研究. 21, pp.49-53, 1966-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

紹介

福田良輔著 『奈良時代東国方言の研究』

森山 隆

福田先生が奈良時代の東国方言に関する論文を公けにされてすでに久しい。このたび、既発表の論文を含めて、あらたな構想の下に、『奈良時代東国方言の研究』を刊行されたことは学界にとつて大きな喜びといはなければならぬ。自序に記された関係論文の多くは関係者以外には入手しにくい『文学研究』に収載されたため、これまで著者の研究の全貌をうかがふにやや不便を感じてゐた人たちにとつて、まことに時宜を得た出版であつたといへよう。

本書の目次は左の通りである。

オ一章 奈良時代東国方言成立の史的周辺

オ一節 序説

オ二節 日本における方言発生の社会的・文化史的条件

オ三節 日本民族・原始大和国家の形成と文化圏・社会・人種・言語

オ四節 古代蝦夷族とアイヌ語的地名の分布状態

オ五節 現日本人の形質人類学上の地方的差異と方言区画

オ六節 弥生・古墳文化の東漸と史前日本語

オ七節 東人―防人歌作者の夷種性

第二章 古代日本語における音節結合の法則

―有坂法則を中心にして―

オ一節 序説

オ二節 古代日本語の母音組織と音節結合

―乙類オ列音とウ列音との結合について―

オ三節 用言における音節結合と語幹・接尾辞との関係

オ四節 八母音の結合単位を構成する能力

オ五節 古事記のホ音について

第三章 奈良時代東国方言の資料

オ一節 表記法から見た万葉集卷十四（東歌）の成立について

オ二節 常陸国風土記の歌謡と東国方言

第四章 奈良時代東国方言の音韻

オ一節 中央語系古代語との音韻的差異から見た東国諸国の方言状態

オ二節 東国方言における甲乙両類の混同と音節結合について

オ三節 東国方言の音韻に現われた下位方言区画とその成立について

(その一)

オ四節 東国方言の音韻に現われた下位方言区画とその成立について

(その二)

―エ列音を中心にして―

オ五節 東国方言の音韻に現われた下位方言区画 その成立について

(その三)

第五章 奈良時代東国方言の語法

オ一節 東国方言における四段活動詞のア列音に付く「る」について

才二節 古代日本語における複語尾の四段活「る」について

才三節 東国方言に残存する特殊語とその語法

才四節 東国方言の語法と中央語系古代語に残存する古い語法

才五節 万葉集の防人歌と東歌における東国方言の語法概観

才六節 東国方言圏における方言的語法の分布から見た小方言区画

第六章 奈良時代東国方言の語彙

才一節 東国方言における方言的語彙の分布から見た小方言区画

才二節 東国方言の語彙と中央語系古代語の語彙との關係

第七章 奈良時代東国方言の実態と成立過程

才一節 奈良時代東国方言の実態

才二節 東国方言の成立と古墳文化

— 結論に代えて —

右は本文の目次で、うしろに八種類の付録図表と人名・事項索引を付した、本文四六二頁付録・索引合はせて一〇四頁にわたる、この種の研究書として他に類を見ない専著である。与へられたわづかな紙数で本書を十分に紹介することは難しいが、もし、この拙文が本書のユニークな研究の一斑をも伝へ得たら、望外の喜びとしたい。

本書の構成は前掲の目次によって明らかかなやうに、標題の「奈良時代東国方言の研究」に直接相当する部分は才四・五・六章に見える音韻・語法・語彙にわたる各章であつて、才三・七章はその資料的性格の究明であり、いはば狭義の国語学的研究はこれら各章の節に、きはめて細密に尽くされてゐるといへる。

第二章は国語資料としていはゆる「上代語」もしくは「古代語」と称して、考究の対象となる分野で、とくに東国方言の考

究途上に、もつとも関連する音韻上の諸問題について、著者の所見の一端を述べられた章節である。もちろん本書は、「古代（もしくは上代）日本語の研究」といふ性格の書でないので、東国方言の性格を明らかにする上に最小限必要な範圍の古代日本語の諸問題を取り扱はれたために、音節結合や音韻の問題のみに片寄つた印象を受けかねないが、上代語一般の語法や語彙の問題に關しては後章の各節に、たとへば才五章四節、才六章二節に著者の所見の一部はうかがへるのである。

右のやうな緊密な構想の下に、さらに本書の著しい特色の一つとして、実は冒頭に、すなはち才一章として「奈良時代東国方言の史的周辺」といふ前章がおかれてゐる点をあげるべきであらう。この七節から成る才一章は狭義の国語学の分野の枠を大きくはみ出して、東国方言の資料となつた防人歌・東歌を支持して、東国方言およびその下位小方言区画の成立の要因を周辺諸学の成果を援用しつつ、日本語の歴史の中での位置づけを試みられた章である。いはば才二章以下の各章各節の随処に見られる細密なまでの用例調査とその分析を、基底から支へる巨視的な方法的視点を明確に示されてゐるのであつて、誤解をおそれずあへて言へば本書中もつとも興味ある章といふべきかも知れない。

ひらたく言つて日本語の成立やその由来について見通しを立てることは困難な仕事である。もし「堅実」な論証が学者の仕事であり、学問がそれによつてのみ成立するものであるなら、著者は才二章以下の国語学的考察の世界に安住された方が賢明

であつたかも知れない。言語の問題を、併せて周辺諸学の成果より考へる行き方には批判的立場も当然考へられる。ただ著者は、日本語(日本方言)の成立過程を論ずるには「文化史・社会史・経済史はもとより、形質人類学・考古学・民俗学等の助けを借りなくては解決できないものがある」とし、しかも、「これらの学問の批判に堪え得る結論であることが望ましい」(六三頁)と述べて居られるところからも、その意図された方向はおのづから明らかであらう。しかしてこの章の大概を要約すれば、縄文時代までは、中部地方以東の東日本地域では、原始蝦夷語が最も広く行われていた。

ロ 原始日本語ないし史前日本語は弥生文化の初期に北部九州、中期に近畿地方に行われた形跡が認められる。

ハ 史前日本語の東国地方への伝播は、日本語種族が東国へ進出するような社会的経済的条件と政治状況が成立した時代で、弥生文化の東国地方への伝播とは必ずしも平行しない。

ニ 四世紀中葉以後、大化改新まで大和系種族は東国地方において先住夷種族の解体・同化、混血を繰り返して、大和系種族化した東人(あづまひと)を生産し、これら混血の東国庶民の子孫が第一次東国方言を形成した。

ホ 奈良時代の東国方言は、右の(古墳時代の)東国方言が更に大化以後の中央語系古代語の影響を受けて成立した第二次の東国方言である。

不得要領の要約で恐縮であるが、東人の夷種性の分析、文証ある蝦夷族の多彩な特質の解釈、現日本人の指紋・血液型を通して察知される形質人類学的特徴の地方差、頭長幅指数の問題、

アイヌ語的地名分布と蝦夷族との関係等々の総括的考察によって支へられた著者の主張は、史前日本語への学問的関心を喚び起こさずに済まされない。

第二章について。古代日本語の音節結合の法則は近時「有坂法則」と呼びならはされてゐる。この、古代の四母音 auo (男性母音)と $ö$ (女性母音)の結合についての秀抜な理論は、論自体の批判よりも、提示された四母音の結合事実をいかに解釈するか、という面から討究されるのが近年の傾向であつたと言へる。いはば古代語研究の基本的前提とも目された有坂法則について、再検討された著者の独自の所見と、古代の八母音のすべてについて、その結合能力を調査し、さらに諸説錯綜する、古事記のホに甲乙両類の別が認められるか否かについての見解を述べられたのが本章の骨子である。

有坂法則は「結合単位(およそ語幹または語根に相当)」を作業の前提とし、同一結合単位内の母音の結合を精査された結果、発見された法則である。その第二則のただし書きを便宜、二音節語において $u-ö$ 結合は存在しない(周知の如く有坂博士の表現は、もっと柔軟かつ慎重な別の表現であるが)と私なりに言い換へると、この法則は再考の余地があることを指摘される。すなはち、有坂氏が除外された固有名詞の中に、前代の音韻形式を伝へてゐる語があり、十数例の $u-ö$ 結合例を説かれるのである。もつとも著者の真意は有坂第二法則の否定ではなく、人名・地名などに見える $u-ö$ 結合事例から、前代における中舌的 i の存在を推定し、有坂法則をも含めて通時論的観点から合理的な説明を試みられたものやうである。この、前

代母音の推定はそれ自体、はなはだ興味ある問題であるが、従来の四母音にとどまらず、古代八母音の結合様式の特徴をまざまらかにし、推古期から奈良末期にいたる約二百年間の母音組織の変遷過程を通時的に考察し、ほぼ古事記成立期までは母音調和の衰退期であり、それ以後は衰退期より崩壊期に臨んでゐたとされる。

古事記のホについては、甲乙両類の区別が少なくとも残存してゐる、といふ論証過程を示されたが、とくに「国のマホラ（国土の果て）」の解釈に示された新見は容易に読み過ぐし得ないところであらう。

第三章について。この章では、中央都人士の手が加はつてゐるかとも想定され勝ちな万葉集巻十四の資料的性格と、常陸国風土記に採集されてゐる歌謡の方言的特色を吟味される。巻十四の成立論は一・二にとどまらぬが、著者はかつて「斯・西・抱」などの使用字母から複数資料説を提出されたことがあつた。本章では更に、巻十四の意義連想字母や東国方言的要素の記録、編纂の諸事情を併せて家持が越中守であつた五年間に、家持によつて整理され、表記字面にも家持の手が加はつたことを考察される。また常陸風土記歌謡については、当時の東国方言の成立過程を示唆する方言現象と、動詞連用形の古語法に關連して資料的価値の重要性を説かれる。

さて、第四・五・六章は本書の中核をなす東国方言の音韻・語法・語彙に関する精緻な論証による新見に満ち満ちた各論なのであるが、すでに紙幅に余裕がなく、以下かいなでの紹介に留まらねばならぬことをはなはだ遺憾に思ふ。

万葉集の防人歌・東歌を中心とする全数調査の分析的結論によれば、単に音韻の面からのみ判断しても、東国にはほぼ各国々を中心とする小方言区画が成立する。その全般の特徴は、中央語に比し、甲iが基本的イ列母音であつて乙iの存在が認められない。エ列に甲乙の音韻の対立が不確かで、オ列においても甲oより乙öが、より安定した位置にあつた。しかも中央語に顕著な母音調和現象は存在せず、却つて中央語に見られぬ特異な結合単位すら発見することができる。等々。

右の事實は、中央語の古い語彙・語法が東国方言中に指摘され得る事實と併せ考へて、奈良時代の東国方言が、文献時代に前接する史前日本語ないし古代日本語当初の頃に分派した、と推定される重要な理由の一つとなつてゐる。さらに小方言区画の特徴や、一地域・一個人に及ぶ方言の実例を細叙し、ひるがへつて前代の古墳文化圏との重なりを確かめられる。その多彩な論述の基底に、第一章以降、主張される著者の言語史観が具体性をもつて語られ、精彩を放つてゐるのである。

第五章、語法について。「降らる」「干さる」「告らる」など「る」「ろ」や、「狙らはり」「立たり」「置かれ」などの「り」「れ」は「あり」系語の後接によつて生じた形だとするものが従来の諸説の一般的傾向であつた。著者は、この接尾辞（複語尾）が四段活であること、派生動詞の接尾辞「る」とは違つて、接続形式活用形式、意味の面からの、いはゆる形態的機能において語としての自立性を有してゐる点を論証し、下二活の複語尾「る」に先行して存在し、中央語系ではすでに衰滅に瀕してゐた四段活複語尾であるとされる。また、この事象に關連して中央語系に見える「過ぐり」「恋ひすらば」

の「り」「ら」、さらには接尾辞「ゆ」「す」「ふ」の機能との比較や助動詞「らし」「らむ」「めり」に含まれる「あり」系的要素の考察と「あり」系語尾を持つ「あり」「をり」「けり」「せり」「めり」などの「り」の形成に関する包括的見解を開陳される。これら動詞語尾・助動詞・複語尾を形成する「り」「る」に関する発生的・意味機能考究の論証過程を読むと、音韻の各章に比してまことに地味な印象を受けるが、文法的考察の教訓的在り方をさへ感ずると言へば、辭言のそしりをまぬかれぬだらうか。東国方言特有の「なふ」がへや、「なふ」に関連して「なな」、さらに「かも」「やも」の論者から、語法概観と章節は続くが、文法史の単なる平面的考察を抜けて、位相差や、次章の語彙の項とも相関して、分布についての、それぞれの微細な面を指摘されるのである。

不手際なことに才六章の語彙、また才七章について、ここに割愛せざるを得ないが、本書に対する専門諸家の支持・批判は当然今後にもまつべきものとして、先生の講筵に連なる私の蛇足的感想を付加するなら、本書の出来栄は、すでにもう、先生の満足されるところではないであらう、いや、ふだんの先生の学識・抱負の一端を述べられただけの先生は「続篇刊行の機会に」(序文)とか「はじめ予定していた若干の重要事項」(結論に代えて)などの語のはしほしにうかがへるやうに、還暦の賀寿を過ぎてなほお元気に、構想の全面的実現を期して居られるものの如くである。その、一日も早い実現を待ち望んで、本書と同様、学界の輝しい共有財産となる日を切望し、この蕪雜な紹介の一文を了る。(昭和四〇年六月、風間書房刊。四五〇〇円。)

第二十号 正誤表

頁	段	行	誤	正
2	上	1	拾遺往生伝	拾遺往生伝
3	下	4	東岸建レ堂	東岸建レ堂
8	上	21	伝えたいもの	伝えたいもの
11	上	23	皇后子	皇后絨子
13	下	22	頭中後が	頭中將が
14	下	17	伏見に	伏屋に
18	上	20	(歌番号ナシ)	157
27	上	8	婦すという	婦するという
29	上	25	第二部	第三部
34	下	18	豊前の	豊蔭の
36	上	7	庚凱	庚凱
49	上	22	最善	是善
		4	君王	君王
		11	為政徳	為政以徳
		15	言・大江匡衡	・大江匡衡
		19	批判されているが	批判されているように
		22	といった筆のすべり	といった暉峻説の筆のすべり
		23	という如きも	という如き新見は
			批評	評価